

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成 30 年 8 月 9 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 情報学研究科

職 名・学 年 博士後期課程 3回生

氏 名 樋 田 智 美

助成の種類	平成30年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	15th International Conference on Music Perception and Cognition/ 10th triennial conference of the European Society for the Cognitive Sciences of Music		
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input type="checkbox"/> 口頭 ・ <input checked="" type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()		
発表題目	The Influx of Different Language Rhythms and Cultures into Musical Rhythms because of the Occupation by Other Countries		
開催場所	オーストリア・グラーツ		
渡航期間	平成 30 年 7 月 21 日 ～ 平成 30 年 7 月 31 日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付し て下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	300,000 円	
	使用した助成金額	300,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	航空券:	191,360 円
		参加費:	26,850 円
鉄道費:		26,000 円	
国内外移動費・宿泊費の一部:		55,790 円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) この度は、貴財団から国際学会研究発表への助成をいただき、誠にありがとうございました。また、助成金振込も非常にスピーディで大変ありがたく存じております。		

成果の概要

情報学研究科 樋田 智美

【国際会議の概要】

平成 30 年 7 月 23 日～28 日にオーストリア・グラーツのグラーツ大学にて開催された The 15th International Conference on Music Perception and Cognition/The 10th triennial conference of the European Society for the Cognitive Sciences of Music (ICMPC15/ESCOM10) に参加した。ICMPC は音楽に関連する学会の中で世界最大のものであり、2 年おきに開催される。音楽をキーワードに記憶・発達・教育・感情・神経科学・演奏・言語など多岐にわたるテーマで口頭発表・ポスター発表・シンポジウム・Keynote が行われた。今回の大会は、今後に向けた前衛的な取り組みとして、オーストリアのグラーツ、カナダのモントリオール、オーストラリアのシドニー、アルゼンチンのラ・プラタのハブを繋いで行われ、大体常に 2 つ以上のハブが繋がれ、現地に行かなくても他のハブのトークを聞いたり、質問したりすることができた。また、参加者限定 Moodle を利用して、再度 YouTube 上で口頭発表やシンポジウムなどを期間限定で閲覧できたり、発表者に対して後日でも質問を送ってディスカッションを行えたりと様々な取り組みがなされていた。今回は、学期末と重なるためか、日本からの参加者は非常に少なかった。

【研究成果発表の概要】

“The Influx of Different Language Rhythms and Cultures into Musical Rhythms because of the Occupation by Other Countries” というタイトルでポスター発表を行った。言語のリズムは「ストレス型（英語やドイツ語）」「シラブル型（フランス語や中国語）」「モーラ型（日本語）」に大別される。音楽におけるリズムも、作曲者の母語の言語リズムと同様の傾向を示すと言われている。しかしながら、過去の先行研究では作曲者の母語のみに着目しており、歴史的背景による他言語や他文化・音楽の流入に着目していなかった。そこで、本研究では、日本のように歴史的背景によって、言語リズムの異なる言語やその文化、音楽の流入による影響を調べるために、1800 年以降に生まれた日本人作曲家の曲のフレーズを時代や音楽史ごとに分類して解析した。その結果、他言語・他文化・音楽の流入後に既存のものと同様の傾向が見られた上、GHQ による占領時にはストレス型のリズムに近づくことが判明し

た。よって、歴史的背景による言語リズムの異なる他言語や他文化の流入によって音楽リズムも変化することを明らかにした。ポスター発表時には、多くの方が訪れ、議論を交わすことができた。正直、私自身が思っていた以上に興味をもってくれた方が多く、改めて本研究の位置づけを考えさせられた。

【謝辞】

この度は貴財団からの助成により、本国際学会への参加が叶いましたことを厚く御礼申し上げます。